

# イギリス奴隷解放の遺産

## —解放奴隷が作った都市フリータウンから—

平成 19 年度入学

派遣先国；イギリス，シエラレオネ

首藤あずさ

キーワード：イギリス奴隷解放，フリータウン，クリオ，教育，Child Slavery

### 対象とする問題の概要

1950 年代以来，奴隷制研究は北アメリカ史やラテンアメリカ史，近年ではアフリカ史においても生産的な分野のひとつとなっている。だが，そのほとんどは奴隷制度の実態や奴隷制度廃止の原因に関するものである上に，白人の残した記録が元になっている。解放奴隷たち自身によって語られた解放後の彼らに関する研究はまだ不十分なのだ。

そこで注目したいのが，西アフリカのシエラレオネである。1992 年から 10 年間続いたダイヤモンド紛争のことで，この国はよく知られているだろう。しかしながら，シエラレオネには，もうひとつ忘れてはならない過去がある。それは，この内戦からさらに 200 年以上も過去にさかのぼるイギリスの政策に関係している。すなわち，首都フリータウンは，イギリスによって解放された奴隷たちの送り先として建設された都市であり，その解放奴隷によって，長い間シエラレオネは支配されてきたのである。



フリータウンのシンボル、  
コットン・ツリー

### 研究目的

イギリスによって大量の解放奴隷が送られて建設されたシエラレオネという国を見れば，イギリスが奴隷解放とどう向き合ってきたかはもちろん，解放奴隷たち自身がどのような国を作ろうとしてきたのを見ることもできるはずである。それゆえに，研究の第一の目的は，シエラレオネにおける解放奴隷とその子孫のその後，とりわけ現代の彼らを追うことによって，イギリス奴隷解放を問うことにある。

その際，主に注目したいのは次の二点である。まず，解放奴隷の子孫として知られるクリオは，奴隷解放をどう振り返ろうとしているのか。そして，170 年近く前の 1834 年に宣言されたイギリス奴隷解放が今，クリオのみならず，フリータウンに暮らすほかの民族の社会にどのような影響を与えているの

か。これらの調査を通して、最終的に、奴隷解放の記憶を通して見えてくる現代アフリカの側面とはどのようなものなのかについても議論できればと考えている。

### フィールドワークから得られた知見について

イギリスが支配していたかつての植民地のほとんどに、イギリスに存在する地名と同じ名の地名やストリート名が刻まれている。シエラレオネもまた同様だ。ところが、イギリス奴隷貿易廃止 200 周年を迎えた 2007 年 3 月、フリータウン市長は、これらのイギリスを由来とするストリート名を、奴隷制廃止に深く関わった解放奴隷たちの名に変更することを宣言した。地元民がシエラレオネの政権を握るようになった 1951 年以降、クリオはあらゆる面で衰退してしまっていると言われていた中、「解放奴隷によって作られたフリータウン」という、町のアイデンティティを維持しようとする試みである。



Sengeh Pieh Street に変わる Charlotte Street

しかしながら、クリオたち自身のアイデンティティは失われつつあるのかもしれない。「クリオとは誰か」という質問をしてみたところ、ほとんどの人々は、「教育を受けた人」と答えた。確かに、少し前までは、シエラレオネで教育を受けることができたのはクリオがほとんどだったと言える。しかしながら、近年、シエラレオネで最も人口の多い民族であるメンデの人々の教育を受ける割合が上がっており、その熱心さはクリオに勝ると言われている。

また、「自由の町」としてアピールする一方で、現在フリータウンは、新たな労働形態である Child Slavery という問題を抱えているが、この問題には、クリオの習慣が大きく影響しているということが分



朝から晩まで水を売る少年

かった。植民地時代から現代にかけて、クリオたちは教育を受けさせるという名目で、貧しい家庭の子供たちを自分たちの養子として迎えてきた。そして、現在ではクリオ以外のほかの民族の間でも養子を迎えるという習慣が広がり、養子として迎えられた一部の子供たちは、実際は教育を受けさせてもらえず、ただ労働させられるという現状があるのである。それにも関わらず、多くの人々は Child Slavery を当然のこととして受け入れている。それは「教育」という大義名分があるからこそだという理由は注目すべき点であろう。

### 今後の展開・反省点

フリータウンには、クリオが中心となって活動している、Krio Descendants Union という団体がある。海外にいくつもの支部を抱えるこの団体は、近年、アメリカやカリブ海域の黒人とのあいだにネットワークを広げようとしている。同じ国で生まれたシエラレオネ人よりも、むしろアメリカへと奴隷として

連れられたアフリカ人の子孫を、海の向こうにいる同志として考え、彼らとのつながりを意識し始めているのだ。クリオの持つ奴隷制度の記憶が、アメリカの黒人たちとの間で何を生み出そうとしているのかについてはこれから調査していきたい。

今回の調査では、クリオ個人の考えや生活についてまでは調べるができなかった。少数民族であり、他人との付き合いを嫌うことで知られているクリオは、仕事と学校、教会に行く以外は家の中で閉じこもりがちで、当初考えていたほど会話をすることができなかった。今後は上述の団体の調査を拡大しつつ、個人についてもインタビューなどにより調査したい。